（AL 関連の実践）【高校/国語】定番教材『富嶽百景』を用いた AL 型授業の試み

筒井和樹（大阪府立岸和田高等学校）

溝上のコメントは最後にあります

対象授業

- **授業**：高校 1 年生　国語総合（現代文）
- **生徒数**：40 名
- **教材**：太宰治　『富嶽百景』　『国語総合　改訂版　現代文編』（大修館書店）

第 1 節　授業の目標

『富嶽百景』は、古くから高等学校の国語教科書に収録されている定番教材である。今回は、書かれた当時の作者太宰治の手記や、周囲の人びとの太宰や執筆前後に関する記述資料などをもとに、太宰が自身の経験をどのように物語化しているかを考えさせた。この活動を通して、事実をもとに創作する方法について学び、作者の創作意図、作品の主題を探らせることを目標とした。

第 2 節　本時に至るまでの主な学習の流れ

本単元の単元計画は図表 1 の通りである。

時	学習する内容
第1時	・作者についての基本的事項を知る。 ・単元の目標について確認する。 ・本文を通読する。
第2時	・御坂峠に行く以前の「私」の富士の見方を読み取る。
第3時	・「私」と井伏鱒二との関係を知る。 ・御坂峠に着いた直後の富士に対する印象を読み取る。
第4時	・三つ峠に登った際に「いい富士を見た。」と評価した理由を読み取る。
第5時	・見合いの席において、「あの富士は、ありがたかった」と感じた「私」の心情を読み取る。
第6時	・茶店の娘さんとのやりとりを読み取る。
第7時	・月見草を選んだ理由を読み取る。 ・老婆と他の乗客との造型の違いを読み取る。
第8時	・茶店のおかみさんとのやりとりにおける「私」の心情を読み取る。 ・「私」の考える「『単一表現』の美しさ」とは何かを考える。
第9時	・結婚の話における、母堂と娘さんの人物造型を読み取る。 ・「この母に、孝行しようと思った」理由を解釈する。
第10時	・帰り道における娘さんとのやり取りを読み取る。
第11時	・茶店の娘さんとおかみさんの人物造型を読み取る。 ・「私は、娘さんを、美しいと思った」と理由を解釈する。
第12時	・「若い知的な娘さん」の人物造型を読み取る。 ・富士山のみをカメラに写した際の「私」の心情を読み取る。 ・山を下りた後に眺めた富士の印象を読み取る。
第13時	・本文の出来事に関わる資料を読み、実際の出来事と物語内の出来事との差異を確認し、創作意図を予想する（グループワーク①） ・先週一週間を振り返った後、「私には小さな〇〇が宿っている」という書き出しで、物語を創作する。
第14時 本時	・日常生活を物語化する活動を通して、物語の創作方法を考える。 ・創作の経験を通して、作者の創作意図を探る。（グループワーク②）
第15時	・実際の出来事と物語内の出来事の比較を通して、『富嶽百景』の主題を探る。

図表 1　本単元の指導計画（大きく）

第 1 時～第 13 時までは、時間をかけて物語の読解を行った。第 14 時、第 15 時において、物語内での展開と太宰が実際に経験したことと比較出来るよう、特に、作者が登場人物や舞台設定

をどのように動かそうとしているのか、それにより何を表現しようとしているのかに着目させた。第 12 時の終わりに、第 14・15 時で扱う資料を配布し、読んでくることを課題とした。（資料はこちら）第 13 時の後半で 5 人 1 組のグループを組ませた。その後、分析する資料の割り振りをグループ内で決めさせ、第 14 時までの課題とした。その後、物語の創作を行わせた。

第３節　本時の目標と授業の流れ

（１）　本時の目標

・　日常生活を物語化する活動を通して、物語の創作方法のひとつを知る。

・　『富嶽百景』において、作者がどのように事実を物語化しているかを考える。

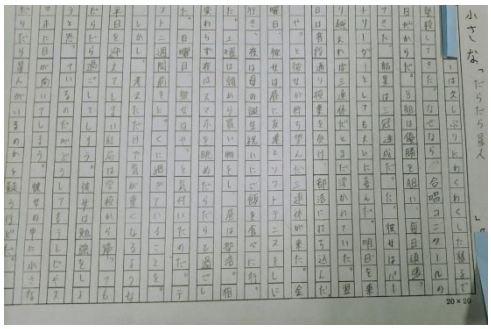
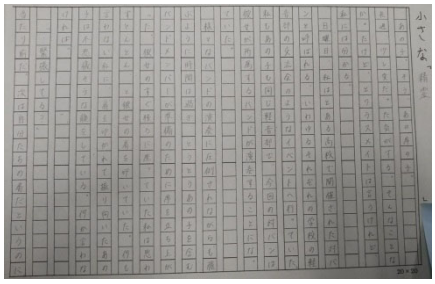
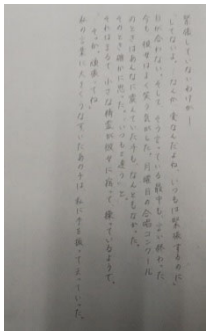
（「C 読むこと」（１）エ）

（２）　授業の流れ

本授業ではジグソー法を利用するために、座席を指定してグループ分けを行った。それぞれのグループは、第 14 時の時点で同じ資料を扱うことになった生徒同士で構成した。本時での分析をもとに、第 15 時でまとめを行わせる。

①　導入（5 分）

・　交流に向けて自らの先週一週間の振り返りと、それをもとに創作した物語を確認する。

図表２　個人活動の様子と生徒の作品例

②　展開①（15 分）

・　創作した物語を交流し、日常を物語にするにあたってどのような点を工夫したかを伝え合う。（4 人 1 グループ）

図表３　グループ共有の様子

※指導上の留意点

・　グループ内の作品で面白かったと思う作品がどのように日常を物語化しているかを考えさせる。

③　展開②（15 分）

・　展開①で挙げたことをもとに、物語を創作するにあたって工夫した点をキーワードで列挙し、ホワイトボードに書き込み発表する。

※指導上の留意点

・　脚色、演出、虚構、捨象、誇張、矮小、順番の入れ替えなどを列挙させ、物語の創作方法に目を向けさせる。

・　教師からも作品例を提示し、補足を行う。

図表４　全体共有の様子

④　展開③（10 分）

・　展開③のキーワード用いながら、作者太宰が自身の経験をどのように物語に活かしているかを観点として資料をもとに本文を分析する。

※指導上の留意点

・　物語内の出来事や展開は、作者の創作意図に基づいて、人物造型や作品の主題と密接に関わっていることを意識させる。

⑤　次時

・　分析をもとに、作者の創作意図、作品の主題を探る。

（３）　指導のねらい

①②　前時に、一週間を振り返り、その出来事をもとに物語を創作する活動を行っている。日常という日々流れる時間の中からいかに出来事を切り取り創作することを通して、生徒が物語を創作することの楽しさと難しさを実感すること、太宰の工夫に着目させるための関心を高

めることをねらいとした。

③　自身の活動をもとにキーワードにさせ、全体で共有することで、物語を分析するうえでの共通の用語を作り、『富嶽百景』における作者の工夫にもその用語を使って説明させることがねらいである。

④　太宰が実際に起こった出来事をどのように加工して物語を創作しているのかを、本文と資料を比べて読みながら探っていくことが本活動のねらいである。

⑤　第 14、15 時の二つの活動を通して、書き手の立場から物語を読み、作者の創作意図、作品の主題を探らせることをねらいとした。

第４節　本時の目標と授業の流れ

（１）　授業の工夫

①　太宰に関する資料を複数用意し、それらと物語内で描かれている出来事などを比較させて、太宰がどのように実際の出来事を物語化しているか、そのねらいは何かを探らせた。

②　その際、複数の資料それぞれで分析が必要なため、知識構成型のジグソー法を用いた。グループは、本文の分析２人（①登場人物の人物造型、②私の心情の変化）、資料の分析３人（③井伏氏の人物造型と、旅に来るまでの様子について書かれたもの、④母堂と見合い相手の娘さんについて書かれたもの、⑤おかみさんと茶店の娘さんについて書かれたもの）の 5 人 1 グループを 8 班作成した。

③　資料を分析する際、議論が本文とかけ離れたものとならないよう、本文に戻って結果をまとめるよう指示した。

④　作者の工夫に着目させるために、「この一週間の自分に何かが宿り、そのものに動かされていたとしたら自分には何が宿っていただろうか。それをもとに『ちいさな〇〇』というタイトルで物語を創作せよ。」という課題を与えた。

（２）　授業の課題

①　資料を分析するための十分な時間を授業内で設けることができなかったことが課題である。他者と共有し、「深い学び」を促すためにも、一人で思考する時間を担保することが課題である。一斉指導とペア・グループ学習の時間の配分を検討する必要がある。

②　今回は作者の創作意図を探るために、物語の創作を生徒に行わせた。（図表２右上、左下、右下）その結果、作り手の立場から物語を分析しようとする様子を看取することはできた。しかし、キーワードとして教室全体で共有し、個人での作業に活用させるまでには至らなかった。個→グループ→全体→個の流れが活きるよう精査したい。

　また、今回は読むことに重点を置いて活動を行った。その結果、作った物語を交流する時間を十分に確保することが出来なかった。物語を創作すること自体は書くことの領域にも関わってくるので、書くことの活動にも活かすことが出来ないか検討したい。

③　全体での共有の際、図表４のようにホワイトボードを壁面に並べて掲示した。しかし、実際には写真のように小さな文字のものは遠くから見にくい。講評の中で溝上先生からもご指導をいただいたが、共有の仕方にもう一つ工夫が必要であった。

溝上コメント

- この授業は、教科書定番教材としての『富嶽百景』の読みだけでなく、太宰に関する関連資料をも別途複数読ませて、13 時間かけて（図表１）、作者が登場人物や舞台をどのように設定し、物語化しているかを考えさせる取り組みであった。さらに、生徒自身にも日常経験から物語を創作させて、作者の立場に立って創作意図なるものを考えさせる取り組みでもあった。圧巻であった。
- 図表２～４に示されるように、授業内では、個－協働－個の学習プロセス、ワークシートベースのアクティブラーニング型授業が実現されていた。知識構成型ジグソー法を用いることで、生徒が分担して「読み」を社会的構成していく高度な作業も組み込まれていた。
- 「授業の課題」で述べられるように、時間不足のため、最後の個への落とし込みが十分にできなかったが、次の（最後の）授業で補えばそれでいいと思う。
- 図表４のグループでまとめたミニ・ホワイトボードが白板に貼られて並べられたが、字が小さくてよく見えず、クラス全体の共有に至らなかったのはやや残念だった。しかし、図表４を見るとわかるように、生徒の発表者の発表を聴く傾聴の姿勢は取られており、ふだんから指導されているのが見て取れた。また、声の小さな生徒には、「もう少し声を大きく」と指導も入っていた。総じて、とても指導や目の行き届いたアクティブラーニング型授業であった。

プロファイル

- **筒井和樹（つつい　かずき）@大阪府立岸和田高等学校（国語）**
- 一言：作品との出会いや他者との対話を大切にしながら、学んだことが日々のどこかで活きる授業であるよう日々模索しています。言葉の豊かさ・多様性を楽しみながら言語生活を送る人に育ってほしいと願っています。